

## 編 集 後 記

日本マイクロサージャリー学会が奈良で産声を上げてから40年経過した時点で偶然にも学会雑誌の編集委員長を仰せつかっていたというだけで記念誌の編集という重責を担う事となった。編集方針は予め編集委員会の合議により決定されていたので、私の役割は原稿の雛形を提示し、寄稿をお願いした先生方に期限以内の出稿を促す程度の事であった。しかし、編集作業を続けるうちに誰よりも先に記事を読む事の幸運に感謝するようになった。日本に西洋医学が普及した歴史を振り返れば創立40年を越える学会は数多あり、この意味では日本マイクロサージャリー学会は決して目立つ存在ではない。しかし、手術手技を冠した学会としてみるとこれほど長く、しかも輝きを失う事なく存続している学会は珍しいのではなかろうか。過去の学会長から寄せられる原稿を一つ一つ確認するうちにそんな思いを強くした。マイクロサージャリーの技術的な礎はJacobsonを始めとする海外の研究者により既に築かれつつあったが、臨床応用という観点では日本マイクロサージャリー学会の貢献は極めて大きい。玉井先生による1968年の母指再接着の成功は、人に対しても1mm前後の血管を操作できる事を示した点で大変な偉業だと思うが、世界に先駆けてこの技術を素早く展開させ、多様な組織移植の技術開発へと繋げていったエネルギーこそがこの学会の原動力であり、その勢いは今も衰える事なく続いているように思う。この事はこれまでも漠然と感じてきたが、40周年記念誌にはその経緯がピピットに綴られており、とても良い記念誌になったと思う。記念式典に国際マイクロサージャリー学会を代表して参加したScott Levine氏の講演でもこの点が強く意識されておりとても誇らしく思ったが、一方では同種組織移植という今日この分野で最も熱いテーマにおいて日本マイクロサージャリー学会が大きく遅れをとっている事に寂しさも感じた。その大きな要因は同種移植黎明期における不幸な事件にある事に疑問の余地はないが、この忌まわしき事件が1968年の発生であった事は奇しき偶然である。本邦では臓器移植法により同種移植がvital organに限定されており、この状況は容易に覆せない。一方で幹細胞を利用する再生医療の開発環境は世界有数のものである。この状況をしっかりと見据えて次の10年を歩み、是非50周年祈念事業の折りにも世界の最先端を歩み続ける学会であってほしいと切に願う。

編集作業を終えるにあたり、マイクロサージャリー学会編集委員各位と、記念誌の編集に誰よりも情熱を傾けて取り組んで頂いた春恒社の上原薫さんに深甚なる感謝を申し上げたい。

平田 仁

### 日本マイクロサージャリー学会創立40周年記念誌

2014年1月30日発行

---

編集・発行 日本マイクロサージャリー学会  
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-12 新宿ラムダックスビル9階  
(株)春恒社 学会事業部内  
TEL: 03-5291-6231/FAX: 03-5291-2176

印刷・製本 株式会社 春恒社  
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-12 新宿ラムダックスビル9階  
TEL: 03-5291-6231/FAX: 03-5291-2177

---